

## 遊牧論の現在

小長谷有紀（国立民族学博物館名誉教授）

日本は言うまでもなく、モンゴル研究において国際的優位な立場にある。領域としては長らく、歴史学や言語学など文献学がその中心であった。1992年の「民主化」以降、フィールドワークが広く可能になって以降は、文化人類学ならびに理系諸分野の研究も盛んである。とりわけ、牧畜研究が集積していると言われている。理系諸分野の研究も環境研究であり、広義には牧畜研究ではあろう。

モンゴル高原を対象にした牧畜研究の嚆矢は、フィールドワークにもとづいた、今西および梅棹の「遊牧論」にあると断言しても、大方の同意は得られるだろう。彼らの遊牧論は、両者の見解が微妙に異なるものの、野生の群れを追随しているうちに遊牧という生活様式が成立したという、起源論であった。

この見解に関する評価について現時点までの変遷をたどりながら、起源論を整理し、牧畜と遊牧の関係を論理的に考察し、あわせて私自身の研究歴の一部をご紹介します。